

令和6年度 第1回向日市歴史的風致維持向上協議会 議事要点録

- 日 時 令和7年3月25日（火）午前10時から正午まで
- 場 所 永守重信市民会館 第1会議室
- 出席者
(委員) 高木会長、神吉副会長、杉本委員、稲本委員、六人部委員、壺井委員、
八木委員、林委員、山田委員
(オブザーバー) 近畿地方整備局建政部計画管理課長代理 上田建設専門官
(事務局・説明員等)
環境産業部 尾田主席課長 産業振興課 安江主席係長、小川主任
都市整備部 都市計画課 上出課長
教育部 文化資料館 玉城館長 文教課 山田係長、渡辺職員
- その他出席者
傍聴者 2名
- 会議概要
 - 1 環境産業部主席課長挨拶
 - 2 議事内容
 - (1) 向日市歴史的風致維持向上計画 令和6年度進行管理・評価シートについて
国に提出する予定の進行管理及び評価に係る資料に基づき、事務局から令和6年度実施事業の進捗等について説明を行った。
 - (2) 向日市歴史的風致維持向上計画 最終評価シートについて
国に提出する予定の最終評価に係る資料に基づき、事務局から計画の達成状況の評価と今後の課題等について説明を行った。

【意見の要旨】

- (1) 向日市歴史的風致維持向上計画 令和6年度進行管理・評価シートについて
- 会 長： 今年度は歴まち計画の最終年度ということで、個人的にこの10年間でとりわけ大きかったのは、物集女城の国史跡指定とそれに合わせて行われたシンポジウム、また、まちおこしになりつつある民芸の再評価ということが向日庵の国有形文化財指定という形で実ったことが挙げられる。それら以外でもこの10年間の取り組み成果が集約している年となった。
- 副会長： 「景観法、屋外広告物法に基づく連携」の「定性的・定量的評価」の記述の中で、“このことから、景観計画の策定支援に関する要望があった際には、積極的に支援する”とあるが、前段の文章とのつながりを考えると、要望に添って支援するという文脈から“景観計画”ではなく“地区計画”ではないか。確認して修正をお願いします。
- 事務局： 検討する。

委員： 「地域歴史ボランティア養成事業」はたいへんいい事業だと思う。「定性的・定量的評価」の記述の中で、“現在2名活動中”とあるが、現在2名しかいないのか、もう少しいるのか、教えてほしい。

事務局： 発足当初はもう少し多くいたが、その後個人的な事情でガイドを離れる方がおられ、現在は2名体制で活動している。ガイドの個人的な知り合いの方や文化資料館のガイドの協力を得ながら、適宜人数を増やすよう活動をしている。

委員： むこう観光スタートアップ講座にどのくらい参加していて、実際そのうちのどのくらいの方がガイドに移行されているのかも含めて記述するといいいのではないか。

全員がガイドに移行するわけではないだろうが、例えばガイドになるときに何か活動する上でハードルがあるのかもしれないので、そのあたりのことを事務局で調べてみて、ハードルをどのくらい下げると参加しやすいかなどを検討するといいいと思う。

この10年間の取り組みでいろんなことが整理できて、10年前に比べて歴史散策できる範囲が圧倒的に広がり、いい場所がたくさんある。これからもこの取り組みは大事である。

会長： 歴まち計画の中で育まれた人材であり、また次につないでいくという趣旨のご意見をいただいた。

副会長： 「史跡長岡宮跡保存活用事業」に記載の図について、これだけ載せると事業が平成で止まっている感じに見えてしまう。ほかの事業で書かれていることとつながる部分もあると思うので、この10年の成果がわかるように、それ以降の取り組みも書き添えておいてはどうか。

会長： 成果を可視化するというお話をいただいた。

「文化財調査、指定、保存管理（活用）に関すること」に2つの古墳のパスが載っている。寺戸大塚古墳の図に驚いて担当者に尋ねたところ、これはあくまでイメージで、もっと歴史が重層していることを示しつつ、雑木林や竹林を残しながら保存活用をするということを聞いて安心した。旧上田家住宅での史跡長岡宮跡内裏内郭築地回廊の再現例のように、歴史の重層性を示すのが、向日市の保存活用の精神になっていると思うので、この2つの図は、前世紀的な復元の形態ではないだろうか。

事務局： 「史跡長岡宮跡保存活用事業」の図については、史跡指定状況を一覧で示しており、この10年間では【J・K・L】の項目の指定が該当する。本市では、史跡指定を受けたら遅滞なく買い上げを行い、買い上げたら遅滞なく整備工事を実施するという形で現在も取り組んでいる。ご指摘のように、史跡指定状況だけで

はなく、公有化状況、整備状況、活用状況がわかるように資料を変更する。

「文化財調査、指定、保存管理（活用）に関すること」の寺戸大塚古墳及び五塚原古墳の整備計画イメージパースは、令和元年に乙訓古墳群を42,000平米買い上げるときに、より市民の方にわかりやすいように作製し、周辺自然環境をなるべく壊さないような形で復元したものである。寺戸大塚古墳については少し墳形が崩れていたため“直す”という意識が強くあったが、これはあくまでイメージを図示したパースであり、今後の保存活用計画や保存整備計画の中で有識者の先生方からご意見をいただきながら調整してまいりたいと考えている。

委員長： 歴まち計画10年になるが、一番最初から関わらせていただいている。10年の間に向日神社周辺の整備も進み、最近では、近隣だけではなく全国や海外からの方も増えてきており、休憩所やトイレもとても喜ばれている。文化財の修復など行政の尽力に感謝している。

（2）向日市歴史的風致維持向上計画 最終評価シートについて

会長： 私は明治以降の近代の歴史を研究しており、最近気づいて非常に驚いたことであるが、明治21年に町村制ができて現在に至るまで、向日市域は130年以上変わっておらず、向日町（市）という独自の文化とコミュニティを持ち続けてきた非常に珍しい例である。歴まち計画は、その歴史を掘り起こした事業でもあった。

副会長： 文言修正を何点かお願いしたい。

「Ⅲ 歴史・文化資源を維持保全するとともに、活用を図る」の「②事業・取り組みの進捗」のうち「5 文化財の指定」について、“向日庵”を書き加えておいてはどうか。告示されているのであれば、文字に表しておかないのはもったいないと個人的には思う。

「A 史跡長岡宮跡保存活用事業」の「①取り組み概要」に、史跡長岡宮跡内裏内郭築地回廊の写真が載っているが、これは2つの文化財について1000年以上のギャップをそのまま見せる形で整備したおもしろい例であるので、キャプション“回廊、築地塀及び柱跡を発掘調査をもとに再現”のあとに“（旧上田家住宅）”と書き添えておいてはどうか。

「3 古代の街道に係る歴史的風致」の「②維持向上の経緯と成果」のうち、「西国街道整備事業」について、“通常のアスファルト舗装から石畳風の道路舗装に改修し…”とあるが、“石畳風の塗装を用いた道路”だということを書くべきである。石畳風にする場合、かつては石を敷き詰めることが多かったが、向日市では、現代のアスファルト舗装を昔風に見せるだけではなく、ここは旧街道だ

という“サイン”として、人が歩きやすいように、車がスピードを出さないように道路の施策として取り組んでいることがすばらしいからである。

「4 用水・ため池と条里制水田に係る歴史的風致」の「②維持向上の経緯と成果」のうち「条里制水田を巡るイベントの実施」において、実施の都度、地域の水利はどうかという点を担当者がかなり重点的に解説しているので、“…条里制水田について知る機会を提供することができた”のあとに、“水利の特色を学んだ”旨の一文を是非入れておいてほしい。

委員： 今回この計画が終了し、次は新たな施策や計画に繋いでいくと理解している。

「ii 「向日ブランド」の創出・向上」であれば、まちてらすMUKOの来館者数、また「iii 観光入込客数の増加」であれば、かぐやの夕べの来場者数がそれぞれ評価項目として挙げられているが、文化や風致の維持向上においても“お金”という視点（指標）は欠かせない。こういった事業をいかに使って稼いでいくかも重要になってこようかと思う。ふるさと向日市創生計画においても今後人口が減っていくと予想されており、経済全体が縮小していくことを考えると、外からの交流人口が非常に大事になってくるだろう。さらにその次に指標となってくるのは、来られた人にいかにこの地域にお金を1円でも多く落としていただくか。そのお金がこういう整備事業に回っていく仕掛けを、次の段階で考えていただく必要があるのではないか。指標面においてそういう点も一つ念頭に置いて、次の事業や計画を考えていただければと思う。

事務局： ご指摘のとおり、向日市内にお金を落としていただけたところがなかなかなく、課題に思っている。ご意見を踏まえ、次の事業に向けて活かしていけたらと思う。

会長： 奈良なども、最近は少し変わってきているようだが、来るだけでお金が落ちず、泊まるところは別の場所という同じ課題を抱えている。

委員： 最終評価シートの「I 歴史と文化に関する情報発信、情報提供に努め、「向日市」の認知度を高める」の「②事業・取り組みの進捗」のうち「長岡京・平安京連携事業」では“竹結びフェスタ”と記されている一方、進捗評価シートの「長岡京・平安京連携事業」には“竹の径・かぐやの夕べ”と記されているので、いずれか文言を統一した方がよい。

事務局： 文言を統一する。

副会長： 指標に関して、向日市は住宅地であり、住宅地としての人気や、新しい住民、若い世代が転入してくることもつながってほしい。長いスパンでバックデータとして持っておいて、政策を考えるときに、そこを目指しているのだと紐付けていただきたい。まちあるきイベントの参加者で、時々「普段住んでいるまちを歩

くことがあまりないため、まちのことをよく知らないので参加してみました」という方がいるが、その感覚はとても大事な気がしていて、そうしたことに興味をつなぎ止めていただければと思う。

向日市の歴史まちづくりは、当初、この制度が始まったときに考えていた施策イメージを大きく覆していることをアピールしていただきたいと思っている。当初に流布していたパンフレットでは、文化財を囲って、その周りをまちづくりしましょうと。向日市はコンパクトなので、歴まち計画の重点区域が市域のほとんどと重なり、市の全体施策と直結する。限られた地域だけ、文化財の周りだけを守るのではなく、まち全体に対して歴史まちづくりのこういった手法が使えるという、いわば“向日市方式”みたいなものを、名前の採用も含めてアピールしていつてはどうかと思っている。大きなハード面に対しても歴史まちづくりの手法を用い、根付かせてきたのが向日市である。

また、国が定める最終評価報告書を書くだけで終わらずに、10年を振り返り、みなさんが読みやすく、手に取れる冊子体を編集してみてもどうかと思う。そうすることで、どうしても堅くなりがちな報告書のフォーマットでは表現しにくい内容が、のびのびと説明できる。

委員： まさに副会長と同じようなことを考えていて、向日市は、10年間この歴史まちづくりの制度をうまく使ってここまで大きく変わってきたので、非常にいい例になると思う。

「向日市の歴史を活かしたまちづくりに関する意向調査」について、どこでもそうであるが、市民の方が取り組みをどの程度わかっているかというところ、ほとんどわからないのが普通であるし、なぜわからないのかといえば、今の景観の見方を普通の人はわからないからなのだと思う。今見えている景観が今できたわけではなく、歴史的な重層性など、色んなものが絡み合いながらできているというところに、皆の目が向くような形でもう少しPRすることができれば、市民の人たちの見る目も違ってくるし、考え方ももっと変わることができる。

歴史まちづくり法ができた当時の国のパンフレットには、表紙の真ん中にお城が描いてあって、それが重要文化財でその周りを何とかしましょうみたいな話で制度が始まった。私も、元々居たまちで携わっていたが、やり始めると全く違うものに変化していった、そのまちの中にある重層的な歴史が絡み合いながら今の形ができているということが大切で、市民の人たちにもそういう広がりの中で今の景観ができていることを、全体事業のまとめを含めて平易にわかるような“何か”があればいいと思う。

会長： 当初、国に提出した青色の歴まち計画書はすばらしいものであったが、10年

間どうであったかということ、もっと手にとりやすい形でまとめるのも一つの手かと思う。

前にも申し上げたが、歴史・考古・建築・都市計画・地域関係団体・行政の人たちが長年の間、集うという場はなかなかないと思う。せっかくこういう学際、地域の人を含めた場であるので、予算はなくてもボランティアでもいいので何らかの形で意見を共有し合う場があればと思う。

副会長： まちあるきイベントを何とかして続けられないか。あまり頑張りすぎずに20人そこそこで歩く方が、みんな話がよく聞けて、最初からそういう意図で始めたイベントだが、年1回なので歩く機会は続けられたらと思う。

計画が終わると、全国の歴まちの自治体と交流はできなくなるのか。

事務局： 先日、国によるヒアリングの機会があり、国からも情報の共有などは引き続き行いたいと仰っていただいた。必要性があれば、今後も応じてまいりたい。

副会長： 私は、向日市と和歌山県の湯浅伝統的建造物群保存地区の2か所で委員をしており、色々な人に他の自治体の取組事例を聞かれることがあるので、向日市の道路塗装の話などを紹介したことがある。向日市が取り組んできたことは、他の自治体から密かに応援されたり、参考にされたりしている。

オガバー： 近畿地方整備局管内では、近畿歴まちサミットという形で毎年3～4つの首長に集まっていただき対面討論など行っている。その連絡会の中に向日市も歴まち認定団体として参画していただいているので、引き続き、歴まちに関する情報の交換など、ネットワークの共有はさせていただくことになる。

その連絡会の中で、近畿における歴まちの裾野を広げていきたいという思いもあり、事例集的なものを事務局で作っていけないかと考えており、向日市にも協力をお願いできればと考えている。

会長： 今後の課題については、歴まちのネットワークの継続であるが、10年間の成果を踏まえた、市民にわかりやすいような、また市民の見方も変えるような何らかの冊子があってもいいのではないかというご意見もあった。せっかく国に通った計画なので、間隔を置いてでも続ける方が、個々の事業も続いていくのではないかという意見もあったので、事務局の方で何か検討いただければと思う。

以上